

に至り、全て水泡に帰したのであった。中国側は、敗退した蒙古軍を、蒙古軍の印をつけた関東軍であると解釈し宣伝した。これは真実ではない。実戦参加の日本人将校は僅か四名で、蒙古軍は純然たる蒙古軍であった。それにも拘らず、中国軍が日本軍に勝つたといふ誤解は中国側に過大な軍事的自信と対日輕侮を生み、やがて蘆溝橋事件に於ける如く、空虚な対日強硬論へと高まつて行くことになるのであった。

第三節 西安事件

「最後の五分間」から蘇生した中共

人民戦線戦術の最大の成果——それはソ連や中共さへ予期してゐなかつた——は昭和十一年十二月に起きた西安事件であらう。事件は今なほ、完全に解明されたとは云へないが、この事件は、醸成されつつあつた国共合作の氣運を一挙に具体化し、日支対決によつて自己の蘇生を図らんとする中共のかねての策謀を現実化し、斯くして蘆溝橋事件への直線道路を準備したものと見て重大な歴史的意義を有する。

既述の如く、昭和十一年ごろ、西遷を終へた陝西省の中共軍は極めて微弱な兵力でしかなかつた。されば中共としては、国民政府の掃共戦を止めさせ、その矛先を日本軍に向けさせて日華相戦はせることが、自己の延命のために絶対に必要なことなのであつた。兵力激減した中共軍は正に氣息奄々、蔣介石の手記「西安半月記」によれば、掃共戦の成功は「最後の五分間」の段階まで来てゐたのである。

その中共が起死回生の策として採用したのが士兵工作（下士官兵の赤化工作）であつた。当時、陝西省で掃共戦に

従事してゐた張学良（西北剿匪副司令）麾下の東北軍は、満洲事変以来、故地満洲に戻る事ができず、已むなく内に駐留を続けてきた軍隊であるため、望郷の念と抗日氣運は殊に激烈であつた。この心理を巧みに利用した共產党の「中国人は中国人を打たず」「一致抗日」「我等と連合し、闘つて満洲へ帰らう」などのスローガンは、いつから東北軍兵士の内部に深く浸透して行つた。

部下と周囲が左傾するにつれて、張学良も動揺して行つたのは宣伝の力の大きさを示すものである。「張学良は掃共と抗日には矛盾があると考へる、その心理的弱点につけこまれ、遂に中共の心理作戦の前に屈服した」とは蔣介石の觀察だが（『中国のなかのソ連』）、正しくその通りであらう。

また学良は自己の経験から昨日の敵も今日の友となるであらうと考へた。例へば于学忠も宋哲元も彼の敵だつたが、今は忠実な部下あるいは親友となつてをり、また学良自身、かつては国民革命の敵対者であつたが、易轍で中央に帰順した経験を持つてゐる。そこで学良は「中共も同じ中国人だから、今日の敵でも明日は良き友人になり得る筈だ」と信じたのであり、共產党に対するこの善意の盲信が彼の途を誤らせる一つの原因になつたと云へよう。

共產党の心理作戦に動揺した張学良は共產党と接触を求め、昭和十一年夏頃、延安で周恩来と極秘に会談し、「共同抗日」の条件として（一）共產軍を国民政府軍に改編する（二）共產党は一切の闘争を停止する（三）共產黨員を釈放し自由行動を許す（四）抗日戦勝利後は共產党を合法政党として承認する——など十項目の合意に達し、その実現への努力を固く約したと云ふ（『蔣介石秘録』）。その後も学良は中共との接触を続け、中共に物質的援助を与へるなど、関係を一層深めたが、それとともに学良の掃共戦への意欲は次第に冷却して行つた。

蔣介石を逮捕監禁

昭和十一年十月下旬、蔣介石（行政院長兼軍事委員長にして西北剿匪總司令）は学良の掃共戦を督励するため西安に

飛んだが、その頃はすでに、東北軍の掃共戦は事実上停止されてゐたのであつた。

事件は十二月十二日早朝に起きた。東北軍将校の率ゐる一隊が、西安東方の温泉地・華清池に滞在中の蒋介石を逮捕し監禁したのである。蔣に随行してきた中央政府高官も一斉に逮捕監禁、あるいは射殺された。西安城内では楊虎城の軍隊が憲兵隊と警察を襲撃し武装解除した。

その夜、張学良と楊虎城は全国に通電し、

- (一) 南京政府を改組して各派の参加を許し、ともに救国の責任を負ふこと
- (二) 一切の内戦の停止
- (三) 愛国的領袖（抗日運動指導者）の即時釈放
- (四) 全ての政治犯の釈放
- (五) 民衆の愛国運動の自由
- (六) 集会・結社の自由の保証
- (七) 総理（孫文）の遺囑の実行
- (八) 救国会議の即時開催

の八項目の主張を発表した。その内容は、当時中共が唱へてゐた要求と殆ど変はらないものであつたため、内外に与へた衝撃は一層大きなものがあつた。

事件の報に接した中共では、蔣の人民裁判を主張する者も少なくなく、毛沢東自身の意見は「殺蔣抗日」であつた。本家のモスクワの指示を仰いだところ、スターリンからは「連蔣抗日」と蒋介石の釈放を命ずる指示が届いた。スターリンの電報に接した毛は「真赤になり、悪態をつき、足を踏みならして怒つた」と伝へられるが、スターリンとしては、蔣を釈放しない場合は、国府軍によつて中共軍が潰滅させられること、また蔣に代つて反共・親日家の汪精衛が政権を取るようになるのを惧れたものと思はれる。

中共に救援求めた学良

事件をめぐつて、中国国内では激しい学良非難の世論が起つた。この世論を背景に、国民政府は張学良討伐を決定した。また蒋介石の態度も学良の予想以上に強硬で、学良の要求を受けつけず、ために青年将校の間に蒋介石処刑論も高まり、学良は苦境に追込まれて行つた。遂に学良は中共に救援を求めると共に、西北剿匪総司令部を解散し、中共の要求を容れて「抗日連軍臨時西北軍事委員会」を結成した。かくして周恩来、葉劍英ら三人の中共幹部が西安に到着、八項目の要求堅持と早期の平和解決が合意されたと云はれる。

その後、学良ははじめて蒋介石に八項目の通電について伝へ、受諾を求めたが、蔣は全く取り合はず、逆に学良の反逆の誤りを指摘した。

二十二日には、遂に蔣夫人の宋美齡が「虎穴に入る」かの如く、宋子文、ドナルド（オーストラリア人。蔣家の私的顧問）らと共に西安にやつて来た。宋美齡は学良に、その行動の非を説くと共に、蔣の解放を求めたが、学良は、蔣の解放には楊虎城が反対してゐると答へた。翌二十三日には、ある「有力者」と面談した、と宋美齡の『西安事变回憶録』は記してゐる。

その「有力者」が周恩来であることは間違ひないと考へられてゐる。周恩来は、中共は事件とは無関係であること、蔣委員長以外に全国を指導できる者の居ないこと、また蔣委員長長の救国の誠意は信じながらも、その処置の迅速ならざることを恨むのみ——などを述べたと云ふ。この面談で周恩来は、蔣の解放を楊虎城に勧告することを宋美齡に約束したとも云はれる。

中央軍の停戦期限の最終日である二十五日、張学良は蒋介石の釈放を決定し、楊もこれに同意した。斯くして蔣は十二月二十五日夕、飛行機で西安を離れ、翌二十六日南京に帰還して事件は漸く落着した。

なほ学良は、事件の責任を取るためと、野心や蔣に対する悪意のなかつたことを証するため、南京へ蔣と同行することを申し出て許可された。軍事委員会軍法会議は十二月三十一日、学良に対して徒刑十年、公權剝奪五年の判決を下したが、四日後の昭和十二年一月四日、蔣介石の要請で特赦された。しかしその身柄は軍事委員会の管理下に置かれ、戦後、国民政府が台湾に移ると共に学良も台湾に渡り、現在（平成元年九月）なほ台湾に健在であると伝えられる。

永遠の謎か——釈放条件の有無

さて蔣介石が無事に南京へ帰還できたのは、蔣が何らかの交換条件を学良らに対して約束したからなのであらうか。この重要な点は今なほ不明の儘に残されてゐる。

中共側は、蔣が内戦停止、一致抗日を約束したと主張し、国府側は蔣の釈放に交換条件は一切なかつたと反論する。事件中に蔣介石が記した日記である『西安半月記』にも、蔣が、学良の要求を終始、峻拒したことしか書かれてゐない。西安出發に際して蔣が張学良と楊虎城に与へた「戒告」が、南京帰還の二十六日に公表されたが、その中には「今日汝等（張と楊）は救国の大義に目覚め、予を南京に送還する決意をし、予に対して特別の要求を掲げたり、約束や命令を強要したりする試みを放棄した云々」とあり、これまた釈放が無条件であつたことを強調してゐる。

蔣介石、周恩来ともすでに世を去り、事件の陰の演出者と云はれ、日本人の間にも知己の多かつた苗劍秋も物故した今、事件の真相を知るはただ一人、台湾に老後を送る張学良その人のみである。が、国府軟禁下にある学良の口から、蔣の名譽と国府の歴史に汚点を残す事柄が語られる筈もなく、事件の真相は永久に陽の目を見ることはあるまい。

では、真実は何れにあると推量すべきなのであらうか。筆者の推論はかうである。

西安に於て中共は、蔣の体面を重んじて釈放条件に署名を要求しなかつたことは事実であらう。これについては中共自身が明言してゐるからである。だが、口頭である程度の譲歩を蔣から取りつけたことは、まづ確かなことと思はれるのである。即ち蔣は、交換条件への署名や具体的な約束はしなかつたにせよ、中共幹部と学良達に相当程度の期待を抱かせるやうな発言はしたのであるまいか。

事件後の国共合作の進展は、この推論の正しさを一面で裏づけてゐるのではないかと思はれるのである。

国共合作への懷疑

西安事件は支那を内戦停止・一致抗日へ方向転換させ、第二次国共合作を促進する契機となつた。

だが、第一次国共合作の時と同じく、このやうな国共合作への動きを疑問視し、批判する向きは国民党内部にもあつた。

例へば胡適は、事件の最中に論文を発表し、国際主義的な共産党は決して愛国主義者たり得ず、共産党のいふ「抗日」は「恥知らずの欺瞞」であると主張し、共産党への警戒を呼びかけた。

また親日・反共派は日本との衝突を避けて国内統一を目指すべしと主張し、汪精衛の帰国を迎へて強く抗日氣運に抵抗した。

既述のやうに、昭和十年十一月に遭難した汪精衛は、翌十一年三月外遊療養の途に上つたが、同年十二月西安事件発生と共に南京政府の帰国要請を受けて昭和十二年一月帰国した。

汪は、ソヴィエト政府の存在しないフランス人民戦線と中共の唱へる人民戦線との相違を指摘し、革命のためには「約束信義」を平然と破り棄てる共産党を信用することの危険を強調、「過去の苦い経験は我々の注意を喚起す

るに値する」と述べて第一次国共合作に於ける中共の背信行為に言及し、共産党と国共合作への強い疑念を表明すると共に「安内」は「攘外」に先行すると論じた。

中共蘇生し、北支緊迫す

にも拘らず、この年一月に内戦即ち掃共戦は停止され、「あと五分間」の命から中共は蘇生した。即ち一月六日、西安の西北剿匪總司令部が廃止され、これによつて、十年間に及ぶ国共内戦が事実上停止されたのである。

親日派の外交部長・張群は罷免され、反日・欧米派の王寵惠が就任した。その結果、張群の「一面抵抗・一面交渉」の外交路線は、欧米寄りに大きく方向転換することになった。

前述の如く、抗日路線は必ずしも一本化されたわけではなかったが、抗日戦準備は経済事情の一時的好転も手伝つて、積極的に推進された。一九三七年（昭和十二年）度の国民政府の軍事費は国家予算の七〇パーセントに上り、この巨額の軍事費を背景に陸軍百七十万人が整理され、百万を越える国民の軍事訓練が開始された。ソ連と中共の術策にのせられた中国は、俄然、軍国主義と戦争への道を狂奔し始めたのである。

北支は緊迫した。ここには宋哲元の第二十九軍十萬、東北軍十一萬など四十萬の中国軍が五千の我が支那駐屯軍を包囲し、更に徐州・隴海線一帯には、中央軍三十五萬が待機して北上の機会を窺つてゐた。他方、各界救国連合会など反日諸団体の抗日気運も日を逐うて激成されて行つた。これが蘆溝橋事件発生直前の北支の状況であつた。中国内戦を対日戦争に転化させた一大動因としての西安事件——それは東亜近代史に於て特筆大書の意義を有すべき事件であつたと云へる。

第十三章 蘆溝橋事件の真相